



『関西企業ヒストリア』

～その強さの秘密・転換点を探る～

創業から70年以上の歴史を重ねる会員企業を取り上げ、時代の荒波を乗り越えて、長い期間にわたって生き残り成長してきた強さの秘密、その歴史の転換点を探ります。

第9回 創業 1913年(大正2年)

丸一鋼管 株式会社

自転車部品工場としての創業と「丸一」ブランドの誕生

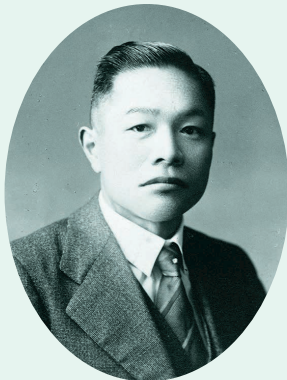
1913年 ▶ 丸一鋼管のルーツである福松製作所は、1913年に平野郷町(現・大阪市平野区平野東)で創業しました。創業者の吉村福松が、町工場で培った技術を活かして、社員8名、2馬力のモーター1基で、月間600セットの自転車用ブレーキの製造を開始したのが始まりでした。

自転車は明治初期に日本に渡来し、輸入自転車の修理と補修部品の生産から徐々に産業として発展していきました。特に1914年に勃発した第一次世界大戦による輸入途絶が自転車製造の国産化を急速に進め、鉄砲鍛冶屋が集積し金属加工が盛んな近隣の堺地域でも多くの業者が自転車部品製造業に転身しました。

そうした中で、福松は生来の生真面目さでモノづくりに励み、自転車用ブレーキに加えてハンドルの製造も手がけるようになりました。そのハンドルは「丸一ハンドル」と名付けられ、すぐさま評判になりました。丸一の「丸」には「永遠の発展と和」、「一」は「純粋で誠実」という意味が

込められ、やがてその名称は製品にとどまらず、「丸一ったん」という会社や経営者を指す愛称としても広まりました。

創業から十余年が経った1926年には、中河内郡加美村(現・大阪市平野区加美西)に工場を移転。新天地で事業を開始するとともに、丸一ブランドの名を取り、社名を「丸一製作所」と改称しました。

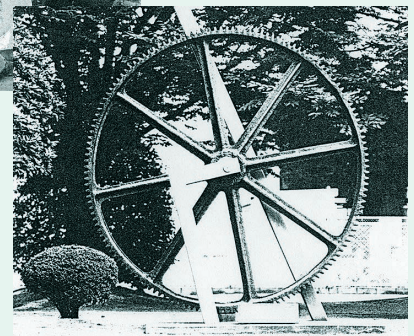


創業者 吉村福松

丸一製作所が製造する「丸一ハンドル」はニッケル・クロームの厚メッキが施されていたため、「いつまでもサビない」と評判を呼び、国内はもとより、遠くは朝鮮(韓国)や満州(中国)にまで販売されました。しかしある時、その満州に販売した約2か月分の製品すべてが不良品として送り返されるクレームが起きました。原因をつきとめると、ハンドルのパイプ溶接部に割れが生じていることがわかりました。極寒の地である満州では、その寒さゆえに素材のパイプに異変が起きていたのです。問題が素材にあるとなれば、部品製造の丸一には如何ともしがたい状況でしたが、福松は「鋼管そのものが悪いのなら、良質のものを自分の手でつくろう」と一念発起。丸太柱のトタン葺き工場1棟とドロベンチ2台を購入し、専任の職人1名をつけて、鋼管製造の試作を開始しました。



吉村福松(右)



ドロベンチのメインギア

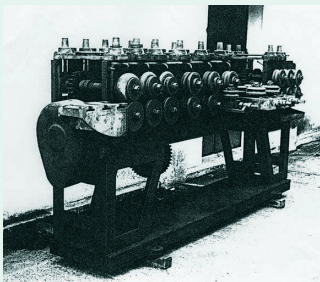
品質のこだわりから生まれた鋼管事業

1937年▶ 最初の鋼管づくりは苦労の日々でした。福松は自転車部品の製造では一流でも、鋼管づくりにおいては素人だったため、良質な鋼管はなかなか完成せず、工場にはスクラップの山が積み上がりました。この頃、丸一は従業員数70名を抱える中規模の町工場でしたが、福松の鋼管研究には会社の利益以上の資金が注ぎ込まれ、経営の維持には苦労が絶えませんでした。

長い努力の末、福松の鋼管研究が完成したのは1937年のことでした。これにより、丸一は素材の鋼管から自転車のハンドル、ブレーキまでを一貫製造できる体制が整いました。

戦後の混乱の中で、1947年12月、それまでの創業家による家業から脱皮して、新たに「株式会社丸一鋼管製作所」を設立。本格的な鋼管専門メーカーとして事業を開始しました。

戦後のスタートを切った翌年、1948年には早くも量産化と自動化に向けた決断がなされました。これを受けて同年5月、



自社製第1号機

丸一鋼管は東京の専門機械メーカーから高効率の新式自動造管機を購入、量産化の第一歩を踏み出しました。また、これと併せて独自に造管機の設計にも取り組み、自社製第1号機の完成により機械化と増産体制が推し進められていきました。

針が打ち出されました。そして、当時の鉄鋼生産最大国であるアメリカを中心に継続的な輸出を実行したことで、海外取引先の信頼を得ることができ、輸出額も年々増大していきました。

海外市場の進出に加え、国内マーケットの販売開拓も積極的に行われました。丸一鋼管の営業・販売戦略は、「使う人の立場になってモノづくりを行う」というもので、そのためには問屋や特約店はもとより末端需要家まで足を棒にしてパイプを売り歩き、その中から将来の需要家ニーズを的確にくみ取ることがモットーとしていました。

1960年には社名を現在の「丸一鋼管株式会社」に変更。以降、地道な販売活動が功を奏して、丸一鋼管は小径構造用鋼管の生産高では全国1位を誇るメーカーになっていきました。



銀座を彩る丸一鋼管の角パイプ

「マルイチポール」を開発 新事業分野への進出

1965年▶

堺工場が1965年に完成したことにより、その事業規模を飛躍的に拡大した丸一鋼管は、「生產品種の多さでは日本一」とも言われ、また品質面においても各方面で高い評価を受けるようになりました。



堺工場埠頭

堺工場で新たに生産された「マルイチポール」は、照明柱や照明鉄塔、道路標識柱、信号柱などさまざまな分野で使用されたことから、特品市場の将来性が大いに期待されました。

このため、丸一鋼管は1972年に建設業の登録を行い、鋼構造物の設計・製作・施工の事業分野に進出を果たしました。



ここが
転換点

輸出市場への進出と 国内販売力の強化

1955年▶ 丸一鋼管は積極的な設備投資により生産体制を確立する一方、国内外市場で販売体制の整備を進めましたが、1955年頃には他社に先駆けて海外市場への進出を果たしました。戦後の鉄鋼輸出は1948年に再開され、朝鮮動乱による世界鉄鋼需要のひっ迫などで1950年代には輸出が急増。1953年に初めて鉄鋼輸出組合が結成されましたが、この早い段階で海外市場の開拓に乗り出したのは、生産設備の近代化と合理化が相まって対外競争力に自信をつけたことが一つのきっかけでした。

当初は東南アジアが主力輸出先でしたが、安定的な輸出と品質向上を同時に実現するには先進国が最適と判断。1957年頃からはアメリカを主とする海外視察と市場調査を重ねられ、この結果、「販売総額の3分の1を輸出に」との大方

エクセレントカンパニー としての地位を確立

1975年▶ 1973年の第1次オイルショックを契機に日本経済は戦後初のマイナス成長を記録し、ついには高度成長が終焉。低成長時代へと移行する中で、鉄鋼業界も深刻な不況に苦しんでいました。

丸一鋼管もその例外ではなく、需要の大幅な低下から1975年には減収減益の決算を余儀なくされました。そのため、当時の堀川会長と吉村社長は低成長時代への対応策として、①品質の向上 ②コストダウン ③機動性の3つを掲げ、社内に対して「需要動向を敏感にとらえ、慎重かつ積極的な努力を」と呼びかけました。特に1960年代半ば以降は「付加価値のある製品づくり」を積極的に推進していましたが、その中でも素材処理加工の強化は鋼管製品の供給力アップのみならず、品質管理やコストダウン、納期厳守など種々の効果が期待できました。このため、丸一鋼管は同業他社に先駆けて、鋼板を加工するスリッター設備やコイルの連続メッキ設備、冷間圧延設備を堺工場に相次いで導入しました。

丸一鋼管は堺工場の建設以来、早期の借入金返済を目指していましたが、1974年3月、ついにはすべての借入金を返済しました。早期の返済を可能にしたのは、堺工場建設という思い切った投資が鋼管需要の増大時期に重なったことが大きかったのですが、同時にその間、積極的に国内外に生産拠点を展開したことが収益の増大につながりました。

この頃、日本経済はオイルショックによる厳しい不況下にあったことも手伝って、どの系列にも属さず、安定した業績を上げ続ける丸一鋼管に対して新聞や雑誌などマスコミ界の注目も集まり、「自主独立の快進撃」と称賛されました。

アメリカ カリフォルニアに 現地法人「MAC社」を設立

1977年▶ 日本経済は1971年の為替の固定相場制から変動相場制への移行に伴い、たびたび円高不況に見舞われ、輸出産業などが大きな打撃を受けました。また、国際勢力の強化によりアメリカとの間で貿易摩擦を引き起こし、1970年代後半には鉄鋼製品もアメリカ政府の強い要請を受けて、日本政府が輸出企業に自主規制を求める事態となりました。

こうした情勢下において、20年来アメリカに鋼管を輸出してきた丸一鋼管は、かねてより構想していた同国での工場設立の好機と判断。まず1977年にロサンゼルス市に事務

所を開設して同地の需要調査と工場用地の買収に着手し、翌1978年12月、商社および銀行の出資を経て合弁会社「Maruichi American Corporation (MAC社)」をカリフォルニア州の現地法人として設立しました。

MAC社はスリッターラインとパイプミル3ラインを擁した工場を同州のサンタフェ・スプリングスに建設。1980年4月より営業生産を開始しました。

丸一鋼管はロサンゼルス地区に長年輸出していたため、丸一鋼管ブランドはほとんどの問屋に浸透しており、現地参入の動向は大いに注目されました。

アメリカ進出は「日本から輸出しようとするから苦勞も多いが、世界一ホットコイルの供給能力がある国で原料を買い、現地で生産すれば大きな発展が望める」との考えのもと行われました。実際、経営環境は良好であり、MAC社は操業2期目にして黒字を計上しました。



Maruichi American Corporation (MAC社)

設立70周年を迎えて

2018年▶ 2018年3月、丸一鋼管は設立70周年を迎えました。設立50周年の時と同じ大阪のリーガロイヤルホテルで盛大に行われたパーティーでは、取引先や関係者を招き、1,000名を超える人が参加しました。

創業以来「優れた製品を供給し、お客様の信頼に応えることにより、社会に貢献する」ことを使命とし、「鋼管ひとすじに」製品づくりに取り組んできた丸一鋼管。

鋼管トップ企業としての地位を不動のものにすべく、グループ丸となって次の100年を目指します。



丸一鋼管 株式会社

本社所在地：大阪府大阪市中央区難波5-1-60 なんばスカイオ29階
従業員数：1,990名(連結) 資本金：95億9,515万円
事業内容：鋼管の製造・販売